

ごん狐

新美南吉

青空文庫

これは、私が小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山なかやまというところに小さなお城があつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐ぎつね」という狐がいました。ごんは、一人ひとりぼつちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種なたねがらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓ひやくしやうや家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとつて、いたり、いろんなことをしました。

或秋あきのことでした。二、三日雨がふりつづいたその間あいだ、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていて、百も舌鳥すずの音がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どっとましくていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにごった水に横だおしになつて、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だ」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついています。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになったところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなどが、ごちやごちやはいっていました。でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎ

やきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上り^{あが}びくを土手^{どて}においといて、何をさがしにか、川上^{かわかみ}の方へかけていきましました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり綱のかかっているところより下手^{しもて}の川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみましました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごつた水の中へもぐりこみました。

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなって、頭をびくの中につツこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首へまきつきましました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくりしてとびあがりましました。うなぎをふりすててにげようとしましたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しようけんめいに、にげていきましました。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助やすけというお百姓の家の裏を通りかかりますと、その、いちじくの木のかげで、弥助の家内かないが、おはぐろをつけていました。鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何なんだろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮のぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間まにか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢おおせいの人があつまっています

した。よそいきの着物を着て、腰に手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮えていました。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

お午ひるがすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地藏ろくじぞうさんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦やねがわらが光っています。墓地には、ひがん花びごなが、赤い布きれのようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘かねが鳴つて来ました。葬式の出る合図あしづです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやつて来るのがちらちら見えはじめました。話はなし声こゑも近くなりました。葬列は墓地へはいつて来しました。人々が通つたあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌いはいをささげています。いつもは、赤いさつま芋いもみたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母かあだ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじやつたにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだらう。ちよつ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

三

兵十が、赤い井戸のところまで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつ母と二人ふたりきりで、貧しいくらしをしていたもので、おつ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置ものおきの後うしろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がし

ます。

「いわしのやすうりだあい。いきのいいわしだあい」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走つていきました。と、弥助やすけのおかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわしうり売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもつてはいりました。ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴むかへ向つてかけもどりました。途中の坂の上でふりかえつて見ますと、兵十がまだ、井戸のところまで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で栗くりをどつきりひろつて、それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯ひるめしをたべかけて、茶碗ちやわんをもつたまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには兵十の頬ほっぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「一たいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもっていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通ってすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわにかくれて、じつとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おつ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに粟やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」

ごんは、ふたりのあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見こに来いよ。その粟を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと、後を見ました。ごんはびくつとして、小さくなってたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつきとあるきました。吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこへはいつていきました。ポンポンポンと木魚もくぎよの音がしています。窓の障子しょうじにあかりがさして、大きな坊主頭ぼうずあたまがうつつて動いていました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつて吉兵衛の家へはいつていきました。お経を読む声がきこえて来ました。

五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえつていきます。ごんは、二人の話をきこうと思つて、ついていきました。兵十の影法師かげほうしをふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さつきの話は、きつと、そりやあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりや、人間じやない、神さまだ、神さまが、お前がたつた一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、まいにち神さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松だけを持っていてやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじやア、おれは、引き合わないなあ。

六

そのあくる日もごんは、栗をもつて、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄なわをなつ

ていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゆうをとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間どまに栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前まいだったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなぎきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口つつぐちから細く出ていました。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日発行第1刷

1997（平成9）年7月15日発行第2刷

初出：「赤い鳥 復刊第三巻第一号」

1932（昭和7）年1月号

※入力時に使われた底本が不明とのことなので、表記は岩波文庫版に合わせた。

入力：林裕司

校正：浜野智

1998年10月23日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ごん狐

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>